



「結局は内職なんだな」木戸が言う。

「でも最近ないでしょ」

「Tシャツにジーンズの若松が答える。

「うちの婆さんが昔やってたよ。造花を組み立てていた。部屋中花だらけだ」

「紹介してくださいよ」

「昔は内職斡旋所があってね、そこへ行けばあったよ。特別な技術はいらない。単純作業だ」

「もうそれでもいいと思います」

会場から人が出てくる。交流会は終わったようだ。

「いいんですか、会場へ行けば、もっといい人と話せたかもしれないのに」若松が言う。

「いいんだよ。話に乗った方が損をする」

会場から出てきた人々は、まちまちな服装で、年齢もまちまちだ。

エレベーター前にテーブルがあり、スーツ姿の男たちが冊子類を渡している。

「ところで、木戸さんは何でした？」

「何って？」

「何屋さんでした？」

「俺はメルマガライターだよ」

「僕はテープ起こしです」

「珍しいね、若い男が」

「妻がやってるもので、実は今日は営業で」

「じゃ、こんなところで、さぼってちゃ駄目じゃん」

「会員登録に来ただけです」

「内職じゃ、食えんだろ」

「はい」

「起業家とかソーホーとか、大袈裟なこと言ってるけど、内職だからね」

「ですね」

「内職じゃ、小遣い銭程度だよ」

「でも、成功してる人も」

「その欲で金を落とすよ」

「ある程度の出費は」

「君らは素人なんだ。上には上がいるんだ」

「うまく利用すれば」

「じゃあ、なぜ会場へ入らなかったの？」

「個人事業者の交流会って言っても名刺を配るだけでしょ。あとは、成功談聞き、ネットショップで店を出そうという話でしょ」

「詳しいね」

「妻がいろいろ行ってましたから」

「で、どう？」

「お金がない人ほどのってしまうのかなあ...と」

「よく見てるね。うちで働かない？ あ、冗談だよ」

木戸は立ち上がり、エレベーター前のテーブルを通過した。男達が一斉に頭を下げた。

了